

## 朗読文1

夏目漱石の小説『三四郎』の一部です。三四郎の恋愛を軸に、人間の心の機微が描かれています。根っからの田舎者・三四郎が、目新しい都会での生活や淡い恋を経験する様子が描かれています。

三四郎は着物を脱いで、風呂桶の中へ飛び込んで、少し考えた。  
こいつはやかいだとじゃぶじゃぶやっていると、廊下に足音がする。

だれか便所へはいった様子である。やがて出てきた。手を洗う。

それが済んだら、ぎいと風呂場の戸を半分あけた。例の女が入口から、

「ちいとながしましうか」と聞いた。

三四郎は大きな声で、「いえ、たくさんです」と断った。

しかし女は出ていかない。かえってはいってきた。そうして帯を解きだした。

三四郎といっしょに湯を使う気と見える。べつに恥ずかしい様子も見えない。

三四郎はたちまち湯槽ゆづねを飛び出した

## 朗読文2

川端康成の短編小説『伊豆の踊子』の冒頭です。伊豆を旅した19歳の時の実体験を元に書かれています。孤独や憂鬱な気分から逃れるため伊豆へ一人旅に出た青年が旅芸人一座と道連れとなり、踊子の少女に淡い恋心を抱く旅情と哀歎の物語です。

道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思ふ頃、

雨脚あまあしが杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追って来た。

私は二十歳、高等学校の制帽をかぶり、紺飛白こんがすりの着物に袴はかまをはき、

学生カバンを肩にかけていた。一人伊豆の旅に出てから四日目のことだった。

修善寺温泉に一夜泊まり、そして朴歯ほおばの高下駄で天城峠を登って来たのだった。

重なり合った山々や原生林や深い溪谷の秋に見惚れながらも、私は一つの期待に

胸をときめかして道を急いでいるのだった。

そのうちに大粒の雨が私を打ち始めた。折れ曲がった急な坂道を駆け登った。

ようやく峠の北口の茶屋に辿りついてほっとすると同時に、私はその入口で

立ちすくんでしまった。余りにも期待が見事的中したからである。そこで旅芸人の一行が休んでいたのだ。

### 朗読文3

次の文章は朗読音楽劇「鳥取城落城と吉川経家」（洲浜昌三作、令和7年十一月鳥取市で公演予定）の一部です。織田信長の命を受け豊臣秀吉は中国地方を攻め、鳥取城は攻撃的になります。毛利元春は鳥取城の城番に、石見福光の城主・吉川経家（当時35歳）を命じます。鳥取城は城内には兵や農民など4千人が餓死寸前状態の生き地獄。経家は、自分が切腹して責任を取るので、城内の者は助けてほしい」と秀吉に申し出ます。その時のことを、行動を共にした山縣長茂が回想して一人で語ります。

#### 5 自刃前に八通の書状と遺言書・・・山縣長茂の語り（脚本を持って）

- 2 -

雨風あめかぜに晒さらされ、霜露しもつゆにうたれ、餓鬼のごとく痩せ衰え生命を落としていく生き地獄のような有り様をどのように語ればいいのか…私には言葉がありません。

この城内の惨状を見て、経家様は野田春実様のちはるさねを呼んで命じられました。

「これから羽柴秀吉殿の本陣へ行って伝えてほしい。直ちに城を開きたい。城内にいる者はすべて助けてほしい。この度の責任は経家にあり、切腹してすべての責任を果したい」

野田春実様は、すぐに秀吉殿の本陣へ行き、経家様の決意を伝えました。秀吉殿は、このように申されたそうです。

「経家殿は忠義のある武将だ。そのような立派な義士を殺せば、この秀吉が、後の世に如何なることを言われるやも知れぬ。経家殿は切腹するに及ばず。

この言葉を聞かれた経家様は、「すべての責任は、この経家にある」と言って、

頑として譲られませんでした。そのために何度も野田様は秀吉殿と渡り合いました。

後に伝え聞くところによると、秀吉殿は早馬を走らせて、安土の信長殿へ伺いをたてられたそうです。信長殿は「惜しい武将だが、やむを得ぬ」と申されたとか。

十月二十三日、日本海から北風が吹き寄せる寒い日でした。秀吉殿のご家来・

堀尾吉晴殿が、秀吉殿の書状を持って鳥取城へ参られました。

それは経家様の切腹を許し、城を開くことを認めた書状でした。書状と共に、お酒を三樽、魚数匹も持って参られました。

次の日、経家様は大広間にみんなを集めて、お礼を言われました。

「皆の者、決して悲しまないでくれ。みんなの役に立ち、吉川の名前をあげるのは幸せなことだ。この経家の真まことの姿を、毛利様、吉川様、そして父上や妻や子供たちにも必ず伝えてくれ」

私たちは別れの盃をいただきました。